

稲盛和夫と仏教思想

吉田 健一（鹿児島大学 稲盛アカデミー・准教授）

Inamori Kazuo and Buddhism

YOSHIDA Kenichi

キーワード：かくれ念仏、六波羅蜜、6つの精進、忘己利他と自利利他、自力と他力

はじめに

第1章 仏教との最初の出会—隠れ念仏—

第1節：稲盛とかくれ念仏との邂逅

第2節：かくれ念仏とは何か

第2章『生き方』に見られる稲盛の宗教観・労働観

第3章：六波羅蜜と「6つの精進」

第1節：六波羅蜜

第2節：稲盛による六波羅蜜の説明

第3節：「6つの精進」の内容

第4節：六波羅蜜と「6つの精進」の関係性

第4章：2つの利他—忘己利他と自利利他—

第5章：稲盛における自力と他力

第1節：仏教における「自力」と「他力」

第2節：稲盛における「自力」と「他力」

第3節：稲盛の自力・他力論を現代的にどう解釈するか

おわりに

はじめに

自らが創業した京セラとKDDIを一代で世界的な企業に育て上げ、80歳を超えて日本航空(JAL)の経営再建を成し遂げ、「平成の経営の神様」とも呼ばれた稲盛和夫氏（以下、稲盛と略す）が2022（令和4）年8月24日に90歳で亡くなった。まさに「巨星、落つ」の感である。

稲盛は現役中にはすでに「平成の経営の神様」との異名をとっていたが、稲盛の死去が報じられた2022年8月30日のニュースでは稲盛を「経営の神様」と報じているテレビ局もあった。これまで「経営の神様」との異名は昭和期（戦後日本）の松下幸之助の代名詞でもあったが、稲盛の死去の報道で「経営の神様」との呼称を使った報道機関があったことは、稲盛が今日において、それほ

どまでに他の経営者とは格の違う特別な経営者と評価されていたことの証左であろう。

稲盛は65歳の時に臨済宗妙心寺派の円福寺(京都府宇治市)で在家得度した¹ことは、ある程度までは一般にも知られていることであるが、稲盛と仏教の最初の出会いは幼少期にさかのぼり、仏教は稲盛の人生観、経営哲学に非常に大きな影響を与えた。あるいは、稲盛が作り上げた経営哲学である『京セラフィロソフィ』には底流に重低音のように仏教思想が流れているといっても過言ではない。稲盛の経営哲学の中には「利他」という言葉が出てくることは稲盛の研究者であれば誰もが知るところであるし、さらには、稲盛は多くの著作や講演の中で「足るを知る」ことの重要性も説いている。

稲盛の経営哲学においては、潜在意識の重要性を説く部分も欠かすことのできない非常に大きな部分であるが、筆者は稲盛の重視した潜在意識については別の論稿で論じている。本稿においては稲盛の経営哲学の中から潜在意識の重要性について説かれた部分を除いて、稲盛と仏教思想の関係について見ていきたい。仏教全体について、この小論で論じることは、そもそも不可能であるが、仏教思想の中でも稲盛の経営哲学の中に出てくる自力と他力(稲盛においては一つの自力と二つの他力)や二つの利他(忘己利他、自利利他)の問題などを対象としたい。

本稿においては第1章で稲盛と仏教との幼少期における最初の出会いを論じる。第2章では『生き方』に見られる稲盛の宗教観を確認する。続く第3章では稲盛の説く「6つの精進」と仏教における六波羅蜜の関連について考察する。第4章では、稲盛の説く「利他」の概念について考察する。そして、最後の第5章では、自力と他力の問題を稲盛はどのように理解していたのかについて考察したい。

第1章：仏教との最初の出会いかくれ念仏との邂逅

第1節：稲盛とかくれ念仏との邂逅

稲盛と仏教との出会いは幼少期にまでさかのぼる。しかも、それは、小学校に入学する前のことであった。稲盛と仏教の最初の出会いは鹿児島の隠れ念仏との出会いであった。年齢でいえば、4歳から5歳の頃のことである。時期でいえば1936(昭和11)年から1937(昭和12)年頃のことである。後年、稲盛は臨済宗妙心寺派で在家得度するが、最初の仏教との出会いは、この時である。

このことは『生き方：人間として一番大切なこと』(2004年)の中に記述されている。少し長くなるが以下に引用してみよう。

「私の実家は鹿児島にあります。まだ四つか五つのころ、父親に連れられて、「隠れ念仏」に同行したことがあります。隠れ念仏とは、徳川時代に薩摩藩によって一向宗が弾圧されたとき、信仰心の篤い人たちによってひそかに守りつづけられた宗教的習慣で、私が幼いころには、まだその習わしが残っていたものと思われ。他の何組かの親子もいっしょに、日没後の暗い山道を提灯の明かりを頼りに昇っていく。みんな無言で、恐ろしいような神秘的な思いに浸されながら、幼い私

¹ 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』(日経ビジネス人文庫、2004年)の253頁-261頁にその記述がある。

も必死で父親の後をついていきました。登った先には一軒の家があり、その中に入ると、押し入れの中に立派な仏壇が置かれていて、その前で袈裟を着たお坊さんがお経を上げていました。小さなろうそくが数本灯っているだけで家の中はひどく暗く、その薄闇に溶け込むように、私はめいめい席を取りました。子どもたちはお坊さんの後ろに正座させられ、静かに低い声で続くお経を聞いていましたが、読経が終わると、一人ずつ線香を上げて拜むようにいわれ、私もそのとおりにしました。そのとき、お坊さんが子どもたちに短い言葉をかけてくれたのですが、もう一度来るようにいわれた子どももいる中で、私はお坊さんから、「お前はもう、これでいい（来る必要がない）、今日のお参りですんだ」と告げられました。

さらに、「これから毎日、『なんまん、なんまん、ありがとう』とって仏さんに感謝しなさい。生きてる間、それだけすればよろしい」といい、父に向かっても、この子はもう連れてこなくていいですよ、と“おすみつき”を与えてくれました。幼い私には、それが何か試験に合格したような、免許皆伝と認められたような気がして、誇らしく、うれしかったのを覚えています。それは私にとって最初の宗教体験ともいえる印象深い経験でしたが、そのときに教えられた感謝することの大切さは、私の心の原型をつくったように思います。そして、実際、いまでもことあるごとに、「なんまん、なんまん、ありがとう」という感謝のフレーズが無意識のうちに口をついて出たり、耳の奥によみがえってくるのです。ヨーロッパの聖堂などを訪れたときも、その荘厳さに打たれて、思わずこの言葉を唱えたほどで、それは宗教、宗派を超えて私の中に血肉化している「祈り」の言葉であり、心の奥底までしみ込んでいる「内なる口ぐせ」といえます」（『生き方』、140頁-142頁）。

このように『生き方』の中で稲盛は幼少期の体験を詳細に記している。この中で稲盛は、お坊さんからもう来なくても良いといわれた時の記憶をたどり「幼い私には、それが何か試験に合格したような、免許皆伝と認められたような気がして、誇らしく、うれしかったのを覚えています」と述べている。

この、「来なくても良い」といわれて「嬉しかった」という感覚は、稲盛がこの時のお坊さんをそれぞれ人間の魂がどのようなレベルかを見ることができると感じており、「もう来なくて良い」といわれたということは、自分はもう一定以上の魂のレベルに達していると認められたという風に感じたということであろう。幼かった稲盛がなぜ、そんな風に感じたのかは不明だが、人間には魂というものがあ、それには仏様に近いレベルの人からそうでない人までがいて、お坊さんにはそれが分かったという風に稲盛は感じたのであろう。

また、稲盛はこの時の体験のことを思い出して、「私にとって最初の宗教体験」とも述べている。これは後に様々な宗教的な経験をして行くこととなる稲盛が自身の人生を振り返って、あの時が最初の宗教体験だったと考えているからであろう。稲盛の場合には14歳の時には、生長の家の創始者である谷口雅春の『生命の実相』と出会っている。谷口の設立した生長の家は純粋な仏教とはいえず、キリスト教のニューソート思想の影響の上に仏教や神道なども取り込んだものであるが、潜在意識の重要性を説く稲盛は谷口からも大きな影響を受けている。これも稲盛の生涯を考える上で非常に大きな宗教体験だったとするならば、かくれ念仏との邂逅は、それに先立つ文字通りの「最

初の宗教体験」だったということである。

さらに稲盛は「ヨーロッパの聖堂などを訪れたときも、その荘厳さに打たれて、思わずこの言葉を唱えた」とも述べている。この部分からは稲盛が長く生きる中で様々な宗教体験をしても、根底にある信仰心は決して狭い一宗一派にこだわるものではなかったことが伺える。2022 (令和 4) 年に 90 歳で亡くなった稲盛は、約 85 年間の長い年月、広い意味での信仰を持っていたことになる。

第 2 節：かくれ念仏とは何か

かくれ念仏 (隠れ念仏) とは一般的には江戸時代に権力から禁止された浄土真宗の信仰を権力の目から逃れて信仰すること、またはそれを行う者や集団のことを指している。南九州の旧薩摩藩や旧人吉藩では 300 年にわたって浄土真宗が弾圧されていたために今でもこれらの信仰形態の名残が見られるとされる。

鹿児島に親鸞を開祖とする浄土真宗が伝わったのは、室町時代中期の 1505 年ごろといわれている。この時から日本の歴史でも他に類を見ない、約 300 年にもわたる薩摩における浄土真宗への弾圧が始まった。浄土真宗の教えが人々の間に流布するようになると、為政者による浄土真宗排除の機運が生じた。西本願寺鹿児島別院によればその理由は「阿弥陀如来の前には、全ての生きとし生ける命は等しく尊い」という浄土真宗の教えが当時の封建体制にそぐわなかったからだである。また、「真宗信者の結束力による統一的な行動が、政治的にも利用され、一向一揆へ進展する危険性をはらんで、封建体制にとっては危険を感じるものであったからと言われている」との見解である²。

弾圧の大きなきっかけとなったのは、慶長 2 年 (1597 年) に第 17 代当主の島津義弘によって正式に真宗が禁止されたことであった。禁止の時期については早くからあったものの、慶長 2 年 (1597 年) 2 月 21 日、再度、朝鮮出兵する島津義弘が出した禁令が全藩的な禁止令の初めとのことであった。現在、かくれ念仏は奄美については不明であるものの、ほぼ全藩的に秘密信者が存在していたとされている。また、信者は個人で信仰を守ったのではなく、「講」と呼ばれる信者の組織を作っていたという。

かくれ念仏への藩からの弾圧は厳しく、特に郷土層への摘発がなされ、身分を百姓へ移し、居住地も移すという処分が行われた。このような弾圧の続くなか、真宗信者は講と呼ばれる地域ごとの信仰者による集まりを結成し、ひそかに山深い辺土や船上やガマと呼ばれる洞穴の中で法座を開いてきた。約 300 年の弾圧期を経て、明治 9 年 9 月 5 日に鹿児島で「信教自由の令」が布達されると、京都本願寺は鹿児島開教に着手した。明治維新後の「信教自由の令」まで鹿児島において浄土真宗の信仰が禁止されていたということはある意味において驚くべきことである。

ただ、鹿児島においては、明治になって近代国家になったことによって信教の自由が認められたので、真宗も禁教が解かれたという単純な理由によるものではなかった。そこにはもっと薩摩・鹿児島独特の歴史があった。薩摩ではまず明治元年 (1868 年) に廃仏毀釈が行われた。それは徹底的

² 西本願寺鹿児島市議別院の WEB サイトにおける説明から引用。最終アクセス日は 2023 年 1 月 18 日。

な廃仏毀釈で全ての寺は破壊され神社に変えられた。その結果、真宗以外の寺も壊され、全ての仏教各派が勢力を後退させた。そして前述したように明治9年(1876年)になって真宗禁制が解かれたのだった。

『京セラフィロソフィ』の中には、仏教的な思想から影響を受けていると思われるものに「感謝の気持ちをもつ」、などの項目がある。さらには「利他の心を判断基準にする」、「反省ある人生をおくる」という項目もある。

「感謝の気持ちをもつ」には、「では、『感謝する』とは、どういうことなのでしょう。まず、自分自身が他に対して謙らなければ、感謝という心は出てきません。厳しい環境の中でも何とか会社を経営していけるのは従業員の協力があることだし、お客様から注文がいただけるからでもあるのです。そういうことも含めてすべて、周りの人のおかげでこんにちの自分はある、という気持ちで謙り、感謝の気持ちを持たなければなりません」との解説がある(『京セラフィロソフィ』、75頁)。

「利他の心を判断基準にする」には「『京セラフィロソフィ手帳』の中で私は、『自分自身を犠牲にしても、相手のためになることをしようと思う心、それが利他の心だ』と言っていますが、この利他の心は、何も経営だけに当てはまることではなく、国を治める場合でも、または教育を行う場でも、あらゆる局面で大切な判断基準となります(『京セラフィロソフィ』、199頁-200頁)とある。

また、「そうは言っても、利他の心で判断することは、本来は悟りを開いた聖者、聖人にしかできないことです。つまり『利他の心』の究極の極致とは『悟りの境地』なのです。ですから、私自身にしても、『利他の心で判断をしなさい』と皆さんに言っているものは、まだまだ中途半端なレベルでしかないわけです(『京セラフィロソフィ』、200頁)との解説がある。

これらの部分は直接、かくれ念仏からの影響というわけではなく、仏教全体からの影響が底流にあると思われるが、稲盛にとって広義の意味での宗教心をもつ原点となる体験がこの子どもの時のかくれ念仏の体験であった。

第2章：『生き方』に見られる稲盛の宗教観・労働観

本章では稲盛の宗教観を全体的に見ておきたい。ただ、その際、この章においては、利他についての議論と自力と他力をめぐる議論及び六波羅蜜については言及しない。これらの3つのテーマについては別途、後の章で論じる。

まず、稲盛はもっとも基本的な人生の目的については、「私たち人間が生きている意味、人生の目的はどこにあるのでしょうか。もっとも根源的ともいえるその問いかけに、私はやはり真正面から、それは心を高めること、魂を磨くことにあると答えたいのです(『生き方』、14頁-15頁)と説いている。

これは稲盛のもっとも基本的な人生観である。多くの書物でも述べられていることであるが、稲盛は人生の目的を「心を高めること」、「魂を磨くこと」としている。これは我々、人間がこの世に

生まれてから、死ぬまでの様々な経験を通じて行っていくことである。よく、稲盛は述べているが、立身出世や金儲け、名誉ある地位を占めることなどは、所詮は虚しいことであり、人生にとって本質的な目的ではない。人間は生まれた時に比べて、どれだけ魂を磨くことができたのが重要であるというもっとも基本にある稲盛の人生観である。

したがって稲盛は「ですから、『この世に何をしにきたのか』と問われたら、私は迷いもてらいもなく、生まれたときよりも少しでもましな人間になる、すなわちわざわざかなりとも美しく崇高な魂をもって死んでいくためだと答えます」(『生き方』、15頁-16頁)と述べ、生まれた時をスタート地点として、亡くなるまでいかに心を高める(つまり魂を磨く)ことができるのが大切だと述べている。

そして、実際の人生については「生きていくことは苦しいことのほうが多いものです。ときに、なぜ自分だけがこんな苦勞をするのかと神や仏を恨みたくなることもあるでしょう。しかしそのような苦しき世だからこそ、その苦は魂を磨くための試練だと考える必要があるのです。労苦とは、おのれの人間性を鍛えるための絶好のチャンスなのです」(『生き方』、16頁)と述べている。実際の人生においては、楽しいことや楽なことよりも苦しいことの方が多いものであるが、それは魂を磨くための試練であり、その苦しさに対しどのように向き合っていくかが、その人間が魂を磨いていくことができるかどうかの分かれ目になってくるということであろう。

これは我々自身も深く胸に手をあてて考えれば、ある程度まで人生というものについて深く考える人々にとっては理解のできることではあろう。もちろん、若い時や、あるいはあまりにも辛いことが多すぎる時には、このようなものの考え方ができるかどうかは人によるだろう。さらには、不幸のどん底にある時、すべての人がこのように人生を捉えることができるかどうかは、また別の問題である。だが、稲盛においては、一貫して試練は心を高める(魂を磨く)ための機会であるという考え方が人生観の底流にある。

また、我々の多くは教育を終えると社会に出て労働の場に出て、働くことによって身を立てていくわけであるが、労働について稲盛は「労働には、欲望に打ち勝ち、心を磨き、人間性をつくっていくという効果がある。単に生きる糧を得るという目的ではなく、そのような副次的な機能があるのです。ですから、日々の仕事を精魂込めて一生懸命に行っていくことがもっとも大切で、それこそが、魂を磨き、心を高めるための尊い『修行』となるのです」(『生き方』、22頁)と述べている。

働くことは生活の糧をえるための手段でもあるのだが、稲盛はそのような西洋的あるいはまた、キリスト教の一部分の中に存していた思想といっても良いかもしれず、マルクス主義の根底にある思想といっても良いかもしれないのだが一な思想を否定する。もちろん、今日においても、大多数の人々は、第一義的には生きていくため(つまり食べていくため)に働いているという現実も厳然とあるであろう。一生、労働に従事しなくても消費活動だけをして生きていける財産のある人を除いては、現実問題として働かざるをえないのだが、それでも稲盛は働くことが人間を作っていく

という考え方を様々なところで説いている³。

このことについて稲盛は「働くという営みの尊さは、そこにあります。心を磨くというと宗教的な修行などを連想するかもしれませんが、仕事を心から好きになり、一生懸命精魂込めて働く、それだけでいいのです」（『生き方』、23頁）と述べている。労働観については、『働き方』（三笠書房、2009年）の中で特化して稲盛は自身の考え方を述べているが、ここで重要なことは稲盛が現実社会において働くということは、宗教的な修行に匹敵するもの、またはそれ以上のものと考えているということである。

なぜ、働くことが宗教的な修行に匹敵するもの、またはそれ以上の意味を持つものであるのか。稲盛によれば仕事というものは楽しいことばかりではなく、むしろ辛いことや苦しいことの方が多く、その辛い仕事、苦しい仕事を通じて、人間は心を高めていけるから（つまりは魂を磨いていけるから）である⁴。仕事というものは、ほとんどの場合においては他者との協働によって成り立っている。一人でできる割合の高い仕事であったとしても、人間関係を全く排してできる仕事はない。そのように考えると人々は仕事を行うにあたって、人と協調したり、対立しつつ調和したり、我慢して譲ったりと様々な経験をしていくことになるが、その中で人々は心を高めていくことができる。もちろん、単に仕事をしていれば、自然に心が高まっていくということではなく、真剣に仕事に取り組まなければならない。

また、稲盛は人間の持つ想念の重要性についても説いている。人間の思いが現実の人生を形作っていくことについて稲盛は「仏教には、『思念が業をつくる』という教えがあります。業はカルマともいい、現象を生み出す原因となるものです。つまり思ったことが原因となり、その結果が現実になって表れてくる。だから考える内容が大切で、その想念に悪いものを混ぜてはいけなく、と説いているのです。積極思考を説いた哲学者である中村天風さんも、同様の理由から、『けっして悪い想念を描いてはいけなく』と述べています」（『生き方』、28頁）と述べている。

ここでは業（カルマ）という言葉が出てくるが、『思念が業をつくる』というのは、心の中にあるものが、現実の人生の現象として現れてくるということである。ここで説かれていることは、悪想念が悪い現実を呼び込み、良い想念は良い現実を招くということである。

仏教には人間が克服すべきもっとも良くないものとして、三毒というものについて説いているが、稲盛も三毒について「欲望、愚痴、怒りの三毒は、百八あるといわれる煩惱のうちでも、ことに人間を苦しめる元凶であり、また逃れようとしても逃れられない、人間の心からみついて離れない『毒素』といえましょう」（『生き方』、152頁）と述べている。三毒を消すことはなかなか難しいことであるが、稲盛は「したがって大事なのは、できるだけ『欲を離れる』ことです。三毒を完全に

³ 『働き方：「なぜ働くのか」「いかに働くのか』（三笠書房、2009年）はこのことだけが特化されてメインのテーマとなっている稲盛の著作である。この中で稲盛は労働を修行と捉える労働観、人生観を明らかにしている。労働即仏行という考え方については、江戸時代以降の日本にも存在していたが、稲盛は現代におけるその思想の系譜の末裔ともいえるであろう。

⁴ 例えば『働き方：「なぜ働くのか」「いかに働くのか』の第1章「『心を高める』ために働く：なぜ、働くのか」（18頁-48頁）に詳しい。

消すことはできなくても、それを自らコントロールして抑制するように努めること。この方法に近道はありません。これまで述べてきた誠実や感謝といった『平易な勤行』を平時から地道に積み重ねていく。あるいは物事を理性で判断する習慣を日頃から自分に課すことなどが肝要です(『生き方』、153頁)と述べ、日常における小さな修練の積み重ねを重視している。

日常の修練について稲盛は「その心を磨き、高めるには、日々の生活の中の精進が大切であるということも、私はくり返し述べてきました。布施、持戒、精進、忍辱、禅譲、智恵というお釈迦様の説いた『六波羅蜜』に集約された修行法を、毎日の暮らしの中で絶えず心がけることが、私たちの心魂を向上させるのです。そのようなことを、私はおぼろげながら感じつつ、人生を歩んできましたが、先にも述べたように、六十五歳を迎えたときに、あらためて人生とは何かということを知りたい、また真の信仰を得たいと思い、得度をして仏門に加えていただきました(『生き方』、227頁)と述べ、自身がずっと考えてきたことについて言及した上で自身が得度した理由についても述べている。

稲盛は65歳の時に在家得度しているが、このことについては「もともと私は、人生を三つの期に分けて考えていました。八十年をこの世での寿命として、第一期の二十年は、この世に生まれ、ひとり立ちして人生を歩みはじめるまでの期間。第二期の二十歳から六十歳までの四十年は、社会に出、自己研鑽に努めながら、世のため人のために働く期間。そして、第三期は、六十歳からの二十年間で、死(魂の旅立ち)への準備にあてるべき期間です(『生き方』、228頁)と早くから得度することを決めていたと述べている。

稲盛が魂の永続性を信じていたことについては、稲盛の読者にはある程度までは知られているが、このことについて稲盛は「死によって私たちの肉体は滅びますが、心魂は死なずに永世を保つ。私はそのことを信じていますから、現世での死とはあくまでも、魂の新しい旅の始まりを意味します。だからその旅立ちに向けて、周な準備をすべく、最後の二十年は人生とは何かをあらためて学び、死への準備をしたい。そう考えて得度を決意したわけです(『生き方』、228頁)と述べている。

稲盛は得度する前から自社(京セラ)の社員や盛和塾の塾生など多くの人々を指導してきているが、得度してから気がついたこともあるとして「たとえば、修行によって、あらためておのれの未熟さを痛感したということがあります。企業のトップとして部下や幹部に指導を行い、偉そうに訓示もし、さもわかったようなことを本に書いたり講演で話したりもしてきましたが、そんな自分の中にひそむいい加減さ、いやらしさを思い知らされて反省もしました(『生き方』、229頁)と述べている。

また、得度してから気づいた自身の限界としては「もう一つ。逆説的ですが、いくら修行に努めようが、私たち凡夫はついに悟りに達することはできないだろう。普通の人間が悟達の境地を得ることはしよせん不可能である。このことも私は痛感しました(中略)どれほど持戒に努め、精進を重ね、何百時間座禅を組もうと、私はついに悟りに届くことはできない。私のように意思が弱く、煩惱から完全に離れることができない人間は、心を磨くためにいくら善きことを行おうとしても、私欲を完全になくし、つねに利他の思いをもちつづけることはできないでしょう。どれほど持戒に

努めても破壊から逃れられない。私を含め、人間とはそれほど愚かで不完全な存在なのです」(『生き方』、230頁-231頁)と述べている。

だが、この続きで稲盛は「しかし、それでいいのだということも私は理解しました。そうであろうと努めながら、ついにそうであることはできない。しかしそうであろうと努めること、それ自体が尊いのだということです」(『生き方』、231頁)と述べ、人間にとって大事なことは悟りを得ることそのものではなく、人間にとって大事なことは、少しでも魂を磨こうという気持ちをもってその方向に向けて努力することだとも説いている。

また魂の永続を信じていた稲盛が「魂は輪廻転生するという仏教の考え方に従えば、私たちは業という前世までの、“垢”をたくさんつけた魂を携えてこの世に生まれ、そこで現世での業を上乗せしながら死んでいく存在といえます」(『生き方』、238頁)とも述べ、この続きで「そして、その内側には、真我という純粋で美しい、仏性を伴った永遠の心が隠れている。その真我がそのまま発露されれば、人間はきれいな心で、善き思いを抱き、善き行いしかなし、仏のような存在になれるのですが、そうはならないのは、その周囲を業をまとった魂が覆い、さらに欲に満ちた本能が覆い…と、真我の発現を邪魔する壁が何重も立ちはだかっているからです」(『生き方』、238頁)と述べている。

稲盛は、人間というものは生まれてきた段階から真っ白ではなく、(前世の行いにより)個々に様々な状態で生まれてくるものであり、各々が過去世の垢をつけて生まれてくると考えている⁵。だが、このことは実際にそうなのかも知れないし、そうでないのかも知れないし、そもそも輪廻転生や魂の転生自体も、現段階では人間が確かめることができない。仮に本当に輪廻転生があったとしても、前世での業をそのまま今世に持ち越して生まれてくるといふ考え方とは別に人間は生まれてくる時にはゼロからスタートすると考えている人もいる。この辺りは信仰の世界であるから、議論をして決着のつく問題ではない。

だが、一方、生まれてからも新しい業を積み重ねて行くということは、大方の人にとっても理解は可能だろう。この世に生まれてから何をしてきたか、どのような心がけで生きてきたかは、ある程度までは自分で思い返せるし、自分で行動と心を統御することは、気が付いた時からある程度までは可能となってくる。人間は生まれる前の自身の魂は確かめようもなく、また他人にどうこう言われると多く人は抵抗感を持つだろう。だが、この世に生まれてからの行動とその行動がどのような心によって行われたのかで、人生がスタートした時点で比べて魂が磨かれもすれば、元の状態

⁵ 『心：人生を意のままにする力』(サンマーク出版、2019年)の中にも「子どもというのは純粋できれいな心をもっている思いがちですが、どうもそうではないのではないかと。どうにも残忍で暴力的なところをもっているのではないだろうか。(中略)人はどうもだれもが純粋で美しい魂で生まれてくるわけではないようです。生まれたばかりでも、魂はすでに曇ったり濁ったりしているものでもあるらしい。だからこそ私たちは人生を通して、魂を磨く努力を怠ってはならないのです」(164頁-165頁)との記述がある。これは、この本が出るまでは、あまり表立って書かれることのなかった稲盛の輪廻転生観がはっきり書かれている部分だと思われる。稲盛は前世(過去世)の続きに今世があると信じているが、人間は魂も前世(過去世)のものを引きづって生まれてくるといふ考え方を信じていた。

よりも悪くなるということは、多くの人にもある程度までは理解できるであろう。

本章の最初で稲盛は人生の目的を「心を高めること、魂を磨くことにある」としているのを見た。少なくとも人間は過去世(前世)のことまでは分からないとしても、この世に生を受けて自分でこの世において生き始めてからは、どのような心を持って、どのような行動をしてきたかは反省することはできる。本章においては、生まれた時に比較して死ぬ時に少しでも心を高める(魂を磨く)ことが必要だと考えていたという稲盛の基本的な人生観と宗教観、労働観を確認しておきたい。

第3章：六波羅蜜と「6つの精進」

第1節：六波羅蜜

本章では稲盛も人々に人生に必要なものとして説いている仏教の六波羅蜜と同じ「6」という数に集約されている稲盛の説く「6つの精進」との関係を考察したい。結論から先に述べれば、稲盛の説く「6つの精進」が全て六波羅蜜に対応しているわけではない。また「精進」は六波羅蜜の中の一つなのだが、稲盛はその「精進」をさらに6つの精進に分けたとも考えられる。しかし、一方、この「6つの精進」は部分的には六波羅蜜と重なる部分もあるので、仏教の六波羅蜜と「6つの精進」との比較を行いたい。

まず、六波羅蜜の前に仏教には「波羅蜜」という言葉がある。波羅蜜とは元々は完全性を意味する仏教用語であり、釈迦が前世における修行の結果、10の波羅蜜を完成させ、その結果、数千年前のインドに生まれたとされている⁶。また大乘仏教においては、菩薩が仏になるために行う修行とされている⁷。

六波羅蜜は大乘仏教で説く人間が悟りに至るまでの6つの修行すべき内容である。六波羅蜜の内容は布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、禪定波羅蜜、般若波羅蜜の6つである。般若波羅蜜は智恵波羅蜜ともいわれる。布施波羅蜜は布施を行うこと、喜捨を行うこと、持戒波羅蜜は戒律を守ること、忍辱波羅蜜は耐え忍ぶこと、精進波羅蜜は努力すること、禪定波羅蜜は心を集中させ、心を安定させること、般若波羅蜜は深い智恵に至ることである⁸。

2世紀の仏教僧であった龍樹(紀元150年～250年頃)によれば釈迦の教えは自利、利他、解脱の3つに要約され、自利、利他、解脱はすべて六波羅蜜に包含されるとされている⁹。そして、龍樹は『宝行王正論』という書物において、六波羅蜜を3つに分けている。布施と持戒が利他、忍辱、精進が自利、禪定、智恵が解脱である¹⁰。ただ、自利といっても、この場合の自利というのは、自分の利益を図るという意味ではなく、自分のために行う修行という意味である。

⁶ アルボムツレ・スマナサーラ『日本人が知らないブツダの話』(学研、2010年)参照。

⁷ 「波羅蜜」：精選版『日本国語大辞典』(小学館)による説明。

⁸ 中村元他編『岩波 仏教辞典第2版』(岩波書店、2002年)参照。

⁹ 梶山雄一、瓜生津隆真『大乘仏典〈14〉龍樹論集』(中公文庫、2004年)参照。

¹⁰ 梶山雄一、瓜生津隆真『大乘仏典〈14〉龍樹論集』(中公文庫、2004年)参照。

第2節：稲盛による六波羅蜜の説明

稲盛は著書の中で六波羅蜜の説明を自分なりに試みているが、まずはそれを見てみよう。まず、「『六波羅蜜』とは、仏の道において少しでも悟りの境地に近づくために行わなければならない菩薩道を記したものだ。いわば心を磨き、魂を高めさせるために不可欠な修行であり、それは次の六つとされています」（『生き方』、160頁）として、稲盛が常々説いている「心を磨き」、「魂を高める」ために不可欠な修行だと説く。

まず、布施については「世のため人のために尽くす利他の心をもつこと。自分の利より相手の利を図り、他人への思いやりをもつことをつねに意識して人生を送る大切さを説くものです。布施とは一般には、施し（喜捨）をすることの意味に使われますが、本来は自己犠牲を払ってでも広く人々に対して尽くすことをいい、またそれができなくても、そのようなやさしい心をもつということなのです（『生き方』、160頁）」としている。

布施には本来は「財施」、「法施」、「無畏施」があるとされている。「財施」は金銭や食料などを施すこと、「法施」は仏の教えを説くこと、「無畏施」は災難に遭っている人を慰めて恐怖心を取り除くこととされる。また布施波羅蜜には、無財の七施という考え方があり、眼布施（好ましい眼差しで見ること）、和顔施（笑顔で人に接すること）、言辞施（柔らかい言葉を使うこと）、身施（人を立って迎えて礼拝すること）、心施（相手に共鳴する柔らかい心）、床座施（座る場所を他人に譲ること）、房舎施（宿を提供すること）などとされる¹¹。元々、布施の中には自己犠牲や利他の心という意味はあまりないのだが、稲盛はここでも自己犠牲、利他と絡み合わせて説明している。

持戒については「人間としてやってはいけない悪しき行為を戒め、戒律を守ることの大切さを説くものです。すでに述べたように人間はさまざまな煩惱を抱えた存在です。欲望、愚痴、怒りの三毒からなかなか離れられません。それだけに、そのような煩惱を抑えて、自分の言動を正しくコントロールしていく必要がある。欲張ったり、むさぼったり、人を疑ったり、妬んだり、恨んだり…そうした煩惱、欲望を抑制することがそのまま持戒となります（『生き方』、161頁）」。

実際には仏教の持戒の中にはより細かくは五戒、八齋戒という概念がある。五戒は不殺生戒（殺生をしないこと）、不偷盜戒（盗みをしないこと）、不邪淫戒（道徳に反する性行為をしないこと）、不妄語戒（嘘をつかないこと）、不飲酒戒（酒を飲まないこと）の五つの戒律であり、八齋戒は在家信者が出家をしている人にならって一日だけ特定の日に守るべきものとされており、五戒に「不得過日中食戒」（正午以降、食事をしないこと）、「不得歌舞作樂塗身香油戒律」（歌舞音曲を聞いたり見たりせず、装飾品、化粧品などを使用しないこと）、「不得坐高広大床戒」（贅沢な寝具や座具でくつろがない）の三つの戒律を付け加えたものである。

五戒については一般的にも知られているが、稲盛はこの「持戒」を「欲張ったり、むさぼったり、人を疑ったり、妬んだり、恨んだり…そうした煩惱、欲望を抑制すること」と三毒を抑えることとしている。確かに五戒で戒めていることの中の2つには、欲望を抑えることにつながることもある

¹¹ 玄侑宗久『お坊さんだって悩んでる』（文春新書、2006年）を参照した。

が(不邪淫戒と不飲酒戒)、残りの3つは殺生、盗み、嘘をつくことなどを戒めており持戒自体が、愚痴、怒りの三毒を戒めているものではない。

精進については「何事にも一生懸命に取り組むこと。すなわち努力のことをいいます。この努力とは、『だれにも負けない』くらいのものでなくてはならないと私は考えています。(略) そのような懸命の精進こそが心を高め、人格を練り上げることを、古今東西の偉人たちの人生は如実に物語っています(『生き方』、161頁)」。

稲盛は精進を今日の言葉でいう努力としている。後に「6つの精進」を見て行くが、稲盛が六波羅蜜の中でも最も重要視しているのは精進だったのかもしれない。この中でも稲盛は「誰にも負けない努力」と述べているが、これは経営12か条の第4条にも出てくる。

忍辱については、「苦難に負けず、耐え忍ぶこと。人間の生は波瀾万丈であり、私たちは生きていく間にさまざまな苦勞に遭遇します。しかしそれに押しつぶされることなく、そこから逃げることもなく、耐えてさらに努力を重ねる。それが私たちの心を鍛え、人間性を磨くのです(『生き方』、161頁)」と説明している。

禅譲については「騒がしく、せわしない社会の中で、私たちはつねに時間に追われ、物事を深く考える間もなく、先を急ぐ日々を送りがちです。それだけに、せめて一日一回は心を静め、静かに自分を見つめ、精神を集中して、揺れ迷うところを一点に定めることが必要になってきます。かならずしも座禅を組んだり瞑想をしたりする必要はありません。多忙な中であっても、いつかの時間を見つけて、心を静めることが大切です(『生き方』、162頁)」と説明している。

智恵については「以上の、布施、持戒、精進、禅譲の五つの修養に努めることによって、宇宙の『智恵』、すなわち悟りの境地に達することができるとされています。そのとき天地自然を律している大本の理、宇宙をつかさどる真理、いいかえればお釈迦様のいわれる智恵へと近づくことができるのです(『生き方』、162頁)」と説明している。

第3節：「6つの精進」の内容

前節では仏教の六波羅蜜とそれに対する稲盛の解説を見たが、本節では稲盛がしばしば人生上または仕事をする時に姿勢として重視した「6つの精進」の内容について見ていきたい。そして、仏教の六波羅蜜と稲盛のいう「6つの精進」の内容を比較検討してみたい。これは単に六波羅蜜と数字上、6という共通点があるという理由からだけではない。「6つの精進」に仏教的な思想がどの程度、反映しているのかを考察するためである。

「6つの精進」は(1)誰にも負けない努力をする、(2)謙虚にして驕らず、(3)反省のある毎日を送る、(4)生きていくことに感謝する、(5)善行、利他行を積む(6)感性的な悩みをしない」の6つである。以下に稲盛による解説を見て行く。

1つ目の「誰にも負けない努力をする」は「仕事をしていく中で、また研究する中で一番大事なことは、『誰にも負けない努力をする』ということです。言葉を換えれば、毎日一生懸命に働くということが、仕事をするうえで、また研究する上で最も大事なことだと私は思っています(『活きる

力』、98 頁)、「この一生懸命働くということを除いて仕事の成功も人生の成功もありえないと私は思っています。一生懸命に働くということを忌み嫌い、少しでも楽をしようと思うならば、仕事の成功はもちろんのこと、すばらしい人生を得ることができないと私は思っています」(『活きる力』、98 頁)、「極端に言えば、一生懸命に働きさえすれば仕事は順調にいきますし、どんな不況が来ようともどんな時代になろうとも、一生懸命に働きさえすれば、十分にそれらの苦難を乗り越っていけるはずです」(『活きる力』、98 頁)と解説されている。

2 つ目の「謙虚にして驕らず」は「謙虚であるということは、人間の人格を形成する資質の中で最も大切なものではないかと思えます。一生懸命苦勞して努力してきた結果、魂が磨かれて人間性が向上していきますと、とりもなおさず謙虚な人間性というものが身についてきます」(『活きる力』、101 頁)、「ですから偉くなった方に会うと、謙虚な方というのは大変に少ないのです。だいたいがみな傲慢になっていきます。その結果、仕事の面でも事業の面でも、没落していられる事例はよくあります。戦後の経済界を見てみても、若い頃一生懸命に、必死に努力をされてすばらしい大会社をつくったにもかかわらず、晩年偉くなりすぎて周囲の人がちやほやし、皆がほめそやし、また財産ができ、名誉を得るに従って傲慢になって、没落していかれた方々が、本当にすべてと言っているくらいです」(『活きる力』、102 頁)、「…謙虚であって決して驕り高ぶるような人間になってならぬと、自分に厳しく言うてきました。謙虚な立ち居振る舞い、謙虚な態度というものは、生きて行くうえで大変大切な資質です」(『活きる力』、102 頁)と解説されている。

3 つ目の「反省のある毎日を送る」は「私は自分自身で、仕事を終えて寝る前にその日一日を振り返って反省するということが、大変大切だと思っています。たとえば、今日は人に不愉快な思いをさせなかつただろうか。不親切ではなかつただろうか。傲慢ではなかつただろうか。卑怯なふるまいはなかつただろうか。利己的な、私だけがよければいいというような言動はなかつただろうか、一日を振り返り、人間として正しいことを行ったかどうかということを確認する作業が必要だということを、私も思ってきました。」(『活きる力』、103 頁-104 頁)、「先ほどから何度も言っているように、一生懸命に『誰にも負けない努力をする』と同時に『反省する』ということを毎日繰り返していけば、魂は純化され、浄化され、美しい魂へ、また善き魂へ変わっていくと私は信じています」(『活きる力』、104 頁)と解説されている。

4 つ目の「生きていることに感謝する」は「この感謝をするということは、私は人生の中で大変大事なことだと思っています。」(『活きる力』、108 頁)、「感謝の心が生まれてくれば、人生に対する幸せを感じられるようになってくるはずですよ。生きていること、いや生かされていることに感謝し、幸せを感じる心によって、人生をさらに豊かで潤いのあるすばらしいものに変えていくことができると、私は信じています」(『活きる力』、109 頁)、「そのためにもまず、生かされていることを神に感謝し、自分を取り巻くすべてのものに『ありがとうございます』と感謝する毎日を送るべきだと思っています」(『活きる力』、109 頁)、「…つまり感謝の念を口にせれば、それを聞いた自分自身もそういう気持ちになっていきますし、また同時に周囲の人々もよい気持ちになっていきますし、穏やかで楽しい雰囲気がつくりだされていきます」(『活きる力』、110 頁)と解説されている。

5つ目の「善行、利他行を積む」は「先ほども言いましたが、人間として善きことを実行する。これはまさに他を利するという利他行を積むということです。中国の古典にも『積善の家に余慶あり』という言葉があります。つまり善きことを積んだ家にはいろんな慶事がある。善行を、利他行を積んだ家には善き報いがあるという意味です」(『活きる力』、112頁)、「我々が善きことを実行する、つまりは人様に親切にいいことをしてあげるといことは、大変大事なことだと私は思っています。ただし、そこには若干注釈がいます」とある。

そして「人に善きことをしてあげるのも二つあると思っています。一つは小善、もう一つは大善です。小善というのは、友人が困ってお金を借りるためにどうしても連帯保証人が要ると言ってきたとき、可哀想だからと連帯保証人になってあげることです。その友人が連帯保証人を求めてきたときに、なぜそんな大きな金が要るのかといろいろ聞いてみると、実はその友人が杜撰な会社経営をし、いい加減な生活態度でやってきたがためにそういう事態になった。連帯保証人になることによってかえってその友人を悪い方向に導いてしまう。そういう場合には、毅然として『いや、大変苦しい立場かもしれないが、連帯保証人になってあげるとは決して君のためにならないと思うんだ』と言って、厳しく断る。それは薄情だと思われるかもしれませんが、これが大善なのです」(『活きる力』、116頁)、「私はこの善行を積む、利他行を積む、人に親切に良くしてあげるといときは、この小善と大善ということを考えなくてはならないと思っていて、今までもそれを実行して参りました」(『活きる力』、116頁)と解説されている。

6つ目の「感性的な悩みをしない」は「人間として我々はしょっちゅう失敗します。そして反省をします。そして反省をし、失敗をした結果、くよくよと思い悩むことがあります。私はこのくよくよと感性的な悩みをしないといけないということを説いています」(『活きる力』、118頁)、「くよくよと思いつけることは心の病を引き起こし、ひいては肉体の病につながり、人生を不幸なものにしてしまいます」(『活きる力』、118-119頁)、「失敗をしたときには反省はせねばなりません。なぜ失敗したかという反省はしなくてはなりません。二度とそういう失敗をしないように固く心に誓うことが大事ではありますが、しかしそれをいつまでも悔やむことは、人生にとって決していいことではありません」(『活きる力』、119頁)と解説されている。

以上が「6つの精進」についての稲盛による解説である。六波羅蜜の一つには「精進」という概念があるので、この「6つの精進」はその六波羅蜜の精進をさらに稲盛が6分割したものであるという見方もできるのだが、この6つの精進のそれぞれを漢字二文字でその概念を表すと以下のようなであろう。

1つ目の「誰にも負けない努力をする」が「努力(精進)」、2つ目の「謙虚にして驕らず」が「謙虚」、3つ目の「反省のある毎を送る」が「反省」、4つ目の「生きていることに感謝する」が「感謝」、5つ目の「善行、利他行を積む」が「利他」といことができるかもしれない。6つ目の「感性的な悩みをしない」だけは少しそれまでの5つとは異質であるが、必要以上に「悩まない」ということも「精進」の中に入れてあるということは、人々は意識しなければ(努力しなければ)、しばしば(悩んでも仕方がない)悩みの迷妄に陥ることの弊害を稲盛は意識していたからだろう。

第4節：六波羅蜜と「6つの精進」の関係性

このように見ると稲盛の提唱した「6つの精進」の徳目または努力すべき事柄は「努力（精進）」、「謙虚」、「反省」、「感謝」、「利他」、「悩まない」といえよう。先にも見た通り、稲盛は六波羅蜜中の「精進」のことを「何事にも一生懸命に取り組むこと。すなわち努力のことをいいます。この努力とは、『だれにも負けない』くらいのものでなくてはならないと私は考えています」と述べている。したがって、「精進＝努力」と考えるとならば、「6つの精進」は全てが努力すべき事柄なのであるが、その中でも真っ先に「努力」が来ている。このことは、とりわけ稲盛が仕事においては、自らできる範囲内のことにおいては、誰にも負けない（最大限の）努力をすることを重視したからであろう。

ここで六波羅蜜の中で説かれている6つの人間が修行すべき内容と稲盛の「6つの精進」で説かれている精進すべき内容を比較すると以下のようになる。

仏教における六波羅蜜とその内容（龍樹による分類）	稲盛における「6つの精進」の内容
(1) 布施波羅蜜（人々に施す）、利他	(1) 努力（精進）
(2) 持戒波羅蜜（戒律を守る）、利他	(2) 謙虚
(3) 忍辱波羅蜜（屈辱に耐える）、自利	(3) 反省
(4) 精進波羅蜜（努力・精進）自利	(4) 感謝
(5) 禪定波羅蜜（精神の統一）解脱	(5) 善行・利他
(6) 般若波羅蜜（智慧に至るころ）解脱	(6) 不必要な悩みはしない

このように比較してみると、六波羅蜜と「6つの精進」は、一見する限りは、あまり共通点はないように思える。明確に関連していると分かるのは、「精進」の部分であろう。「精進」は六波羅蜜においては一つの修行すべき内容であるが、六波羅蜜を重視していた稲盛はとりわけ、その中でも精進波羅蜜を重要視しており、精進だけをさらに細かく分けたと考えても良いだろう。しかし、この一つしか共通点がないかといえば、そういうわけでもなく、稲盛は布施波羅蜜の説明の中で自身の解釈として「世のため人のために尽くす利他の心をもつこと。自分の利より相手の利を図り、他人への思いやりをもつことをつねに意識して人生を送る大切さを説くものです」と述べていることから、布施波羅蜜の部分が5つめの「善行、利他行を積む」で説かれている利他と共通するということがいえるかもしれない。

2世紀の仏教僧である龍樹¹²は六波羅蜜の6つを布施波羅蜜と持戒波羅蜜を利他、忍辱波羅蜜と精進波羅蜜を自利、禪定波羅蜜と般若波羅蜜を解脱と分けていることは先に少し言及したが、これ

¹² 龍樹は2世紀のインドの仏教僧。日本では漢訳名で呼ばれる。浄土真宗では蓮如以降、八宗の祖師（全ての大乗仏教を指す）とされる。また浄土真宗では七高僧（浄土真宗が誕生するまでの先人としての7人の高僧）の一人とされている。

に当てはめてみても、稲盛の考え方の基本が理解できるかもしれない。稲盛の最も重視する「精進」（誰にも負けない努力）の部分は自利であり、そして同時に重視している善行、利他行（5つ目）の部分は「布施波羅蜜」にあたる部分である。

仏教の六波羅蜜と稲盛の「6つの精進」とを比較すれば2つまでは重なっていると考えることが可能だが、他の部分はどうかであろうか。分類が難しいのは「感性的な悩みをしない」の6つ目の「不必要な悩みはしない」の部分である。この部分については、筆者は別の論稿で詳しく論じているが、稲盛に独自の思想の中でも特にオリジナリティのある部分である。これは仏教の思想からストレートにきているというよりは谷口雅春や中村天風からの影響が多いと考えられる部分である。

「(反省さえ十分にした後) 不必要な悩みをしない」ということが、あえて我々が日常で意識すべき「6つの精進」の中に入れられているのは、先にも述べたように、人間というものは意識的に努力しなければ、往々にして悩みの蟻地獄に陥ってしまうからであろう。稲盛が大きな影響を受けた宗教家の谷口雅春や日本におけるニューソート思想の先駆者の中村天風の教えの中には「心が呼ばないものは近づいて来ない」という考え方が中心にあるが、この「6つの精進」の6つ目の「感性的な悩みをしない」については、ここから来ていると思われる。

残りの3つの「謙虚にして驕らず」、「反省のある毎日を送る」、「生きていることに感謝する」で説かれている、我々が目的に努力すべき事柄である「謙虚」、「反省」、「感謝」はどうであろうか。これらは、直接的には六波羅蜜の中に説かれている内容とまでは言えないことが明らかになった。だが、謙虚に人々に接すること、謙虚に生きること、日々反省を怠らないこと、日々、感謝の念で生きることの重要性も広い意味ではどの宗教でも重視する徳目であるが仏教の中にもこれらの考えは重視されている。

感謝の部分は先の章で確認したように、稲盛が小学校に入学する前の隠れ念仏の体験からも来ているので、六波羅蜜の中には含まれてはいないが、稲盛と仏教との出会いから来ているものといえるだろう。謙虚の部分について稲盛はよく「ただ謙のみ福を受く」という中国の古い言葉を引用して説明するが、仏教の中に謙虚の重要性を説く教えがないというわけでもないだろう。

そして、ややこじつけかもしれないが、6つの精進の中の3つ目の「反省のある毎日を送る」（反省）の部分は、日々、自分の行動と心のあり様を振り返ることであるから、六波羅蜜の中では禅定波羅蜜との関係性を指摘できるかもしれないが、事実、稲盛自身は禅宗（臨済宗）の仏僧でもあったことから、禅定波羅蜜については、意識していただろう。稲盛が日々、反省することの重要性を説いていたことは、おそらく自身も禅宗（臨済宗）の仏僧であったことと無関係ではないだろう。

ただ、禅定波羅蜜には人間が解脱に至るための修行という意味合いがあり、稲盛の「反省のある毎日を送る」は解脱を目指すというよりは、日々、自分の心を自己点検していくという部分に主眼があるので、あまり強く関係性が認められるといい過ぎるとこじつけ感はぬぐえないかもしれない。以上のように稲盛の「6つの精進」で説かれていることを六波羅蜜の中でもその内容を明確に見つけることができるものは二つ（精進、利他）、六波羅蜜の中にはないが仏教の思想からの影響とみても不自然ではないものが二つ（感謝、謙虚）、関連性が認められるものが一つ（反省）、分類が不能

なの一つ（不必要な悩みをしない）といって良いかもしれない。

第4章：2つの利他－忘己利他と自利利他－

稲盛がその著作や講演などで、しばしば仏教の言葉でもある「利他」を説いたことは有名なことであるが、本章では稲盛における利他概念がどのようなものであったかを考察する。まずは、以下に代表的著作の一つ『京セラフィロソフィ』の中から稲盛の言葉を見ながら検討を加えて行く。

利己と利他について考えることは非常に多くの論点を含む難しい問題であり、様々な議論がある¹³。まず、利己と利他はいかなる時でも必ずしも対立する概念というわけでもない。利他でないものが必ずしも利己ではないのと同様に、利己でないものが必ずしも利他でないこともあり得る。もちろん、利他でもなく利己でもなく中間的なものもある。昨今、コロナ禍により、ある種、何かとつてつけたような「利他ブーム」といっても良いものが一部、出版界で起きているようでもあるが、どこまで本質的な議論が展開されているのかは疑わしい。

さらには利他といった時に、相手の感じ方、捉え方によっては、ある人が他のある人に対して利他的と考えた行動が実は利己的になっている場合もあるという問題も一部の論者からは指摘されている¹⁴。しかし、本稿においては、利他とは何かということ論じることを目的とはしていない。本稿ではあくまでも稲盛における利他概念とその使われ方（文脈）について考察を進めていく。

「私たちの心には『自分だけがよければいい』と考える利己の心と、『自分を犠牲にしても他人を助けよう』とする利他の心があります。利己の心で判断すると、自分のことしか考えていないので、誰の協力も得られません。自分中心ですから視野も狭くなり、間違った判断をしてしまいます。一方、利他の心で判断すると『人によかれ』という心ですから、まわりのみんなが協力してくれます」（『京セラフィロソフィ』、197頁）。

¹³ 例えば日置弘一郎は『利他の構造』（ミネルヴァ書房、2021年）の中で「利己と利他は相補概念ではなく、利己でないものが利他であるというわけではない。利己的でも利他的でもないという行為はたくさんある。さらに、問題になるのは利己的でも利他的でもあり得るという行為である。この場合、行為選択としてみると利己はわかる。その時点で自分の利益を最大とするように行為を選択するということになる。しかし、外部の観察者が、自己利害の最大を意図しているかを判断することは困難である。自己利益を最大化しようとした行為選択を行っても、結果として他社の利益を増進したように見えることはあり得る。利己的でない行為選択がすべて利他になるという保証もない。行為選択をする時点での情報の完全性はもちろん保証されるわけではなく、厳密な意味での決定方針は確定しない」と述べている。

¹⁴ 例えば東京工業大学の伊藤亜紗は「利他では、『してあげる』ことをつい考えるのですが、受け取ってもらってこそ利他なのです。よく言われる『人のために何かをしてあげる』という発信型の利他は、必ずしも利他になるとは限りません」と述べて、「利他の大原則は、人をコントロールしてはいけない」と述べ、今の安易な利他ブームにいくつかの違和感を示している。また伊藤も、利他の対義語が利己と思われがちだが、一見、利他的な人間の利己的なふるまいについては懸念を示している。

これは『京セラフィロソフィ』の中の利他についての説明であるが、まず稲盛は人間には「利己の心」と「利他の心」の二つがあるという基本認識を示している。当然ながら、人間の心や人間の行動を単純に2つに分けられるのだろうかという議論の余地はあるのだが、まず稲盛は人間には何人にも利己的な側面と利他的な側面があるとする。そして、稲盛は利己の心は「自分のことしか考えていない」ものであり、利他の心は「『人によかれ』という心」とする。

続いて稲盛は人間一般の姿としては「われわれは日々直感的に判断をしがちですが、トレーニングされていない人間が直感的に判断を下す場合、たいていは『本能』の部分で物事を考えています。本能とは、われわれの心を形成している基本的な部分で、自らの肉体を守ることを最優先する心です。自分自身にとって有利になるよう行動しようとする、あるいは考えようとする心で、私がよくお話ししている、人に良かれと思う『利他の心』の対極に来るものです」(『京セラフィロソフィ』、198頁)との認識を示している。

ここの本本当に人間というものがあるのかという部分については、議論の余地が十分であると筆者はかねてから考えているが、稲盛は「トレーニングされていない人間」、「直感的に判断を下す場合」、「自らの肉体を守ることを最優先する心」という表現を使っている。つまり、このレベルの人間は極めて原始的なレベルでしか物事を判断できない人々だということになるだろう。もう少しいえば、このレベルでしか物事を判断できない人は、動物的なレベルでしか物事を判断できない人たちだということであろう。

だが、このような人々は社会の少数派というわけでもなく、稲盛はどうやら、このレベルの人間が一般的に社会では多数派だと考えている様子である。稲盛の書籍には基本的な人間観として繰り返し、このような認識が示されている。このことは「つまり人間というものは、考えるときに、自分にとってそれは都合のいいことなのか悪いことなのか、自分の会社がそれでもうかるかもうからないかというふうに、自分を中心に据えて物事を判断しがちであるということです。普通、経営者の多くは、このように本能で判断を行っていることと思います」(『京セラフィロソフィ』、198頁)との記述から伺える。

本稿では『京セラフィロソフィ』から稲盛の言葉を引用しているが、この認識は必ず稲盛の書籍に登場する。その上で稲盛は利他の心の重要性を説くのだが、稲盛は自分自身が常に利他の心で判断が下しているのかということについては「そうは言っても、利他の心で判断することは、本来は悟りを開いた聖者、聖人にしかできないことです。つまり、『利他の心』の究極の境地とは『悟りの境地』なのです。ですから、私自身にしても、『利他の心で判断しなさい』と皆さんに言っているものの、まだまだ中途半端なレベルでしかないわけです」(『京セラフィロソフィ』、200頁)と述べており、自身も(現実に生きている普通の人間である上は)中途半端な状態であるとの認識を示している。

そして、稲盛は「利己の心」について、「もう少し、『利他の心』についてお話ししてみます。利他とは、他の人に喜んでもらう、他者を助けるということです。お釈迦様がその前世で、今にも飢えて死にそうな虎の親子に自分の身を投じて食べさせたというお話がありますが、利他の最たる行

為とは、このように自分の身を犠牲にしてでも他を助けるという仏教では説いています」（『京セラフィロソフィ』、202頁）との有名な仏教説話を紹介している。

この説話をもう少し詳しく紹介すると、以下のような話である。仏典の中に『ジャータカ』という物語集があり、その中には釈尊が前世で、菩薩として悟りを求めて修行をしていた時の話が取められている。その中に釈尊と飢えた虎の話があるのだが、この話が忘己利他の精神を示しているとされている。その話は次のような話である。ある時に釈尊が森を歩いていると、出産直後の雌の虎に出会った。虎は腹を空かせていて、空腹のあまり出産した子どもを食べようとしていた。それをみた釈迦は虎の餌になろうとして、その前に横たわったが、虎は力が尽きて釈迦に襲いかかることが出来なかった。そこで釈尊は近くの崖に登って、そこから飛び降りて、自分を殺して虎の餌になることで、虎を救ったという説話である¹⁵。

この仏教説話は有名なものであるが、利他の中でも究極の利他である忘己利他がどのようなことを示したものである。忘己利他については、日本の天台宗の始祖である最澄（伝教大師：767～822）の有名な言葉がある。最澄の『山家学生式』の中に「忘己利他慈悲之極（己を忘れ他を利するはこれ慈悲の極みなり）」という言葉がある。これはまず、自分の利益は忘れて、他（他人、他者）を利することは慈悲の極みであるという意味である。だが、己を忘れるということを究極まで追求すれば、先ほどの仏教説話にあったように他者のために命を差し出す（捧げる）というところまで行きつく。

ここで重要な論点になってくるのは「忘己」の部分について、どこまで我々は己を忘れることができるのかということである。日常においては自分のことを「後回し」にする、自分のことを「最後に回す」ようにするということが出来ても究極的に命まで差し出す（犠牲にする、捧げる）ことが可能かという話になると、多くの人は命まで犠牲にできるかといえば、考えあぐねるだろう。

忘己利他といった時の忘己の内容を必ずしも究極的な意味での自己の命を捧げることに限定をせずに、自己の利益を「忘れる」、または「一切、考えない」こと、「（自ら進んで）捨てる」こと、「（自己利益を考慮せずに）周囲と他人のことを先に考える」ことと考えれば、ある程度までの忘己利他の実践は可能かもしれない。だが、先ほどの仏教説話のレベルを忘己利他した場合には、他者のために命を捧げるようなことは、人によってはできるとしても、それは人間の一生においては一度しかできない。

この辺については稲盛も現実的な利他を勧めている。このことについて稲盛は「実際に、先ほど利他の心の究極とは、自分の命を犠牲にして相手を助けるということだと言いましたが、それでは命がいくらあっても足りませんから、一生のうちに何度でもできるわけもなく、この究極の『利他』を規範とすることはできません。しかし、『利他』にはまた別のとらえ方もあるのです。誰もが皆が

¹⁵ 大谷大学のWEBサイトの中の仏教用語の「忘己利他」の解説記事を参照に記述した。

「https://www.otani.ac.jp/yomu_page/b_yougo/nab3mq000000s3z.html」。最終アクセス日は2023年1月18日。

現世に生まれ出てきて、一回しかない貴重な人生を生きています。だからこそ、この世では森羅万象あらゆるものが共生し、共存していかなければなりません。自分も生き、相手も生かす。つまり、地球にある生きとし生けるもの、すべてのものが一緒に生きていけるようにすること、それが出たのです。そういう意味で、決して矛盾していないはずです」(『京セラフィロソフィ』、203頁～204頁)と述べている。

これは「忘己利他」に対して「自利自他」と言われるものであって、自己を完全に犠牲にする(滅する)ことによって、他を利する(生かす)のではなく、自他ともに成り立つところを目指すということである。ここで稲盛は「すべてのものが一緒に生きていけるようにすること、それが出たのです。そういう意味で、決して矛盾していないはずです」と述べているが、完全に利己的な心によって利己的な振る舞いをして、他人(相手)のことを考えないのでもなく、また己を完全に犠牲にして、他者を救済するところまでを日常的な規範とするのでもなく、利己的過ぎる人に対しては、利他的な考え方を一部、入れることによって、自利利他を目指す、共存共栄を目指すという意味であろう。

この記述から明らかなように、しばしば利他を説く稲盛であるが、稲盛の説く利他は「忘己利他」ではなく「自利利他」であることが明らかである。自利利他という考え方であれば、忘己利他と比べると、一気にハードルは下り、心がけ次第で日常的に実践が可能なレベルとなってくる。かつて、松下幸之助は「世のため、人のため、ひいては自分のため」という言葉を残しているが、これも自利利他である。ただし、松下の言葉の重要な部分は「世のため、人のため」が先に来ている部分である。「自分のため」が先に来ることはあり得ない。自利利他も順番からいえば、まずは「利他」が先であり、その結果としてそれが「自利」にもなるということである。この自利と利他のスパイラルがうまく回り出すと、社会は奪い合いや憎しみの連鎖ではなく、お互い様に助け合うということとなり、資本主義下の商売においても良いスパイラルが生まれて行くことになる。

ただ、稲盛は「人のため」といった時に、それが本当にその人のためになることなのかを十分に考えなければならないということも同時に強く説いていた。これは「ここで大切なことは、相手にとって何が本当にいいことなのかということを考える必要がある、ということです。例えば、つぶれかかっている会社から、『実は今お金がない。掛け売りをしてもらえないか』と言われてたり、『手形で売ってくれ』と頼まれたとします。調べてみると、その会社は来月くらいには倒産するだろうとうわさされていて、手形は落ちそうにない。それでも相手は『何とか売ってくれ』と頼んでくる。その場合、売るべきなのか、それとも断るべきなのか。(中略)そういうとき、私は『大善と小善』ということを考えます。例えば、自分の子供をかわいがるあまり、甘やかし放題に育てる。その一瞬一瞬は子供も喜んでくれるのですが、結果として、わがまま勝手に育ち、とんでもない人間になってしまい、不幸な運命をたどる。このように、目先のことしか考えずに相手に施そうとする善行を「小善」といいます。そのときはいいように見えても、後々悪い結果を招くことになる。『小善は大悪に似たり』と言いますが、つまらない善をなすことは、かえって悪をなすことになるのです」(『京セラフィロソフィ』、204頁-205頁)という記述からも理解できるが「大善」と「小善」につ

いて、十分に考えなければならないということを稲盛は強く説いた。

もちろん、「小善」も一応は形の上では「善」であるのは違いないのだが、これは目先の小さな善のことであり、本質的な善ではないということである。ここで稲盛は「小善は大悪に似たり」という言葉も引用しているが、何が本当にその人にとって（相手にとって）、本当の善になるかということは長期的な視点から考えて判断をしなければならないということである。

さて稲盛は利益を求めることについては、当然ながら全否定をしているわけではない。これは稲盛自身が実業家であったのだから、当然と言えば当然のことであって、何らの不思議もないことだが、次の「もちろん利を求める心は、事業や人間活動にとって必要です。ただし、その欲が過ぎてはいけません。自分が儲けたいというギラギラした欲望や煩惱だけで経営しても、強烈な願望があれば、事業は伸びていきます。ただ、長い目で見ると、決してうまくいかない。欲望に任せたまま、つまり利己が過剰であっては、いつか必ず破綻を迎えることとなります」（『人生の王道』、65 頁）との記述からも明らかなことである。

ここで稲盛は「利己が過剰であっては、いつか必ず破綻を迎える」と述べている。稲盛は「過剰」な欲望を戒めているが、これは仏教でいう「足るを知る」という考え方から来ているものであろう。商売人、経営者であれば利益を出さなければ事業を継続できなくなるし、事業家でもなくても、自分の生活を成り立たせ、家族を養い、さらに老後の生活不安から解放される程度の所得を求めることや、先の備えることは過剰な欲ではないだろう。どこからが、過剰なのか、どこまでが容認される範囲内なのかということについては、具体的な指標を稲盛は示してはいないが、明らかに行き過ぎた過剰な欲望は社会全体のためにもならなし、さらに最終的にはそのような欲望を持つ人間も破綻を迎えることがあるということを稲盛は感じていたのであろう。

また、稲盛は人間の本質について、「人間はもともと、世のために何かをしたいという善なる思いを持っています。そのような家族のために働く、友人を助ける、親孝行をするといった、つつましく、ささやかな個々の利他行が、やがて社会のため、国のため、世界のためといった大きな規模の利他への地続きになっていくのです」（『人生の王道』、65 頁-66 頁）と述べている。

稲盛は、人間はそもそも、「世のために何かをしたいという善なる思い」を持った存在だと考えていた。そして、本質的にそうである人間は、善なる思いをできるところから徐々に拡大して行くことの重要性を説いていた。家族、友人、親を対象とした身近な利他はやがては社会、国、世界と広がると稲盛は利他を地続きのものと考えていた。この辺りの問題は、現実の人間社会、人類社会は正義と正義のぶつかり合いによって紛争が起こっているのだが、稲盛はそのような問題には深くは言及していない。視点を上げて、それぞれの人が譲り合うことで、利他の範囲も広がっていると考えていたのかもしれない。

人間にとって謙虚であることの重要性も強く説いた稲盛は、「名声を欲張る、地位を欲張る、それらは西郷（隆盛）がいうように、すべて自分を大事にするということに端を発し、最もよくないことです。また、事がならないのもすべて、そのように己を愛しているからです。自己中心的な『自己愛』が働き、自分だけよければいいと考え、行動するから、他人の協力が得られないのです。自

分が自分が、という利己ではなく、相手のため、従業員のため、社会のためと、考え方を利他に変えれば、他の人からの信頼と協力が得られ、事業だって人生だって、必ずうまくいくはずです」(『人生の王道』、84頁-85頁)とも述べている。

ここにも、「自己中心的な『自己愛』」という言葉が出てくるが、稲盛は盛和塾の塾生や京セラの従業員に経営論以前に人の道を説いた。そして、何よりも稲盛が嫌ったのが利己的で傲慢な人間であった。先の章で確認したが「6つの精進」の中で精進(努力)、謙虚、感謝、反省、善行・利他行の重要性を説いた稲盛であるが、その逆の怠惰、傲慢、強欲、利己心を嫌った。これは、怠惰、傲慢、強欲な人、利己心を持った人は周囲の人々や組織に悪影響を与えるだけではなく、その人自身の人生も良くないものになっていくということを稲盛自身が実人生で何度も実際に見てきたからであろう。

第5章：稲盛における自力と他力

第1節：仏教における「自力」と「他力」

最後に本章では稲盛における「自力」と「他力」についての考え方、自力と他力という言葉の使われ方について検討しておきたい。稲盛と仏教との最初の出会いは幼少期の鹿児島のかくれ念仏であった。浄土真宗は「他力」である。かくれ念仏については第1章で言及した。しかし、稲盛が65歳で在家得度したのは、臨済宗であった。ある意味において、「他力」(浄土真宗)と「自力」(臨済宗)の両方の仏教に縁のあった稲盛がどのような他力観と自力観を持っていたのかについては非常に興味深い問題を含んでいると思われるので本章で検討したい。

そもそも、「自力」、「他力」という言葉も仏教の言葉であるが、実際の日本社会においては他力という言葉が多く局面で誤って使われているので、最初に他力と自力の本来の意味について確認しておきたい。

ある程度まで一般的に、日本の仏教においては日蓮宗(法華宗)や禅宗が自力で浄土宗や浄土真宗が他力であるということまでは理解されている。この基本は共有されているという前提で以下の記述を進めて行く。日蓮宗や禅宗は自力だと述べたが、仏教(大乘仏教)には聖道門と浄土門という考え方がある。聖道門は自力による仏道修行をして悟りを開くという考え方である。一方の浄土門は—これが日本においては法然の浄土宗と法然の弟子の親鸞による浄土真宗である—、自力による仏道修行をやり通すことの限界を悟り、阿弥陀如来による救済に委ねるという考え方である。

現代の日本では「自力」を自分の力だと考えるのは一般のことであり、これは決して間違っていることではない。この場合の「自力」とは一般社会での自分の努力という意味での「自力」と仏道修行における「自力」の両方の意味で使われる。「自力」の場合にはどちらの場合も誤りではない。「自力」といった時には単純に「自分の力」と解して良いだろう。だが、一方で「他力」という言葉はほんどの人によって、ほとんど誤解されているといっても良いかもしれない。もっとも大きな誤解は「他力」という言葉が「他人の力」、「他者の力」だと解されていることである。また、「他人の力」や「他者の力」というだけではなく、自身の努力を放棄した「他人任せ」というような意味

で使われることすらある。

だが実際にはそのような使い方は完全な誤りであり、仏教における他力とは、衆生を悟りに導く仏・菩薩の力、仏・菩薩の加護のことである。特に浄土門では阿弥陀仏の力を指し、このことを弥陀の本願力という¹⁶。他力の「他」というのは阿弥陀如来を指し、「力」とは如来の本願力を指している¹⁷。つまりは、仏教における「他力」とは「他人の力」ではなく、「阿弥陀如来の力」のことであり、そもそも、阿弥陀仏が人々（衆生）を救済しようという願を立てている（発願している）ということ信じの上で成り立つ信仰である。

現代の日本においては、よく、スポーツなどにおいて、「自力優勝の可能性が残っている」とか、「なくなった」という表現がなされる時に一緒に「他力」という言葉も使われることがある。「自力」の日常的な意味における使われ方はさておくとして、このような文脈で「他力」という言葉を使うこと自体が誤っているのである。もう少し仏教における「自力」と「他力」について、歴史的に意味を確認しておきたい。そもそも、仏教の基本は「自力」であると考えられていた。そもそも仏教では自力による修行が基本と考えられてきたので、日本では浄土宗や浄土真宗が「他力」という言葉を使うことに対して、他の宗派が「自力」という言葉をわざわざ使用することもない。自力は自分の力で仏になることを目指すことである。

仏道修行とはそもそも、この悩み多き身である人間が、自分自身が仏になることを目指す道である。単に自分の悩みがなくなる状態を目指すというものではない。人々を救済するのが仏であるから、そう考えれば人間が仏を目指すのは大変なことである。仏になることを目指す人間はまず、仏になり衆生を救済するという「願」を立てる。そして、願を立てた次の段階として、「行」を重ねることによって仏になる。行の中には八正道や六波羅蜜など様々なものがある。禅も行の一つだが六波羅蜜の中にある布施波羅蜜なども行である。一般に誤解されているようにも思うのだが、仏道修行によって仏になるというのは、人々を救済する仏になるということなのであるから、ただ単に自身が悩みから解放され、満足な人生を送る状態になることが最終目標なのではない。

このような仏道修行の本来のあり方を考えると、当然ながら普通の人間にはやり通すことができないという考えが出てくる。そこで登場したのが、大乘仏教の中の浄土教（浄土門）である。浄土というのは仏の世界であり、仏国土ともいわれる。娑婆世界（現実の人間世界のこと）で行を修めることができなかつた人間を一旦、仏の世界に生まれ変わらせようとする思想が生まれてきたが、これが浄土教である。

そして、その浄土教（浄土門）がさらに日本で発展し法然の浄土宗や親鸞の浄土真宗となる。これは浄土三部経と呼ばれる『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』を信仰の対象とする宗派である。親鸞は「他力というは如来の本願力也なり」と述べているが、如来とは阿弥陀仏のことであり、「他力」というのは阿弥陀仏の本願のことである。浄土宗や浄土真宗では「他力」を

¹⁶ 松村明監修、小学館国語辞典編集部編『大辞泉』第2版下巻（2012年）を参照。

¹⁷ 同上。

強調するが、それは阿弥陀如来の大願が人間に注がれているということを強調しているのであり、この「他力」の「他」は阿弥陀仏を指していることを、一応は理解しておくことが大事である。

第2節：稲盛における「自力」と「他力」

ここからは稲盛が自力と他力という言葉を使っている文章を見ていきたい。あまり稲盛は「自力」、「他力」という言葉を使った文章を著作の中には書いていない。『生き方』、『京セラフィロソフィ』にも利他については出て来るのだが、これらの著作の中では「自力」、「他力」ということについては説かれていない。何か所かの講演で、稲盛は自力と他力について触れているが、ここでは盛和塾ニューヨークの塾長例会における2006年11月26日の講演「一つの自力と二つの他力」の発言の中から紹介していきたい。

まず、稲盛は次のように経営には3つの力があると説く。「経営には三つの力が要るといいましたが、その一つ目は経営者そのものが力を持っていること。すなわち、経営12ヶ条を実行できる力を持っていることが条件となります。二つ目は、実はこれまで、あまり強調してこなかったものになります。三つの力の二つめは、自分が経営をしていく場合、自分と同じような気持ちで経営してくれるパートナー的な人を得る力です。一つ目に経営者自身の自力が要するというのなら、二つ目は自分の副官、片腕という他力が必要だということです。この他力を得ることができる経営者でなければなりません。他力の1番目としては、自分の右腕となるような人です」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)。自力については、自分自身の力という意味で、まず経営12ヶ条を自分で実行できる力が必要だと述べている。ここまでは経営者自身が自分の努力でなすことであるから文字通りに自力である。そして稲盛は3つの力のうちの2つ目の力として他力の一つ目を挙げている。ここでの他力は周囲の人の力という意味である。

そして2つある他力のうちの1つ目の他力にもう1つの種類があり、それは「他人の力という場合、もうひとつあります。全従業員の力を得るということです。全従業員の信頼と協力を得られるような、自発的に従業員が働いてくれるような雰囲気をつくるためには、会社経営については赤裸々なまで透明に話をして、コンパの席を通じては、私はこういう経営をしていこうと思うし、その結果、従業員の皆さんにこういうことをしてあげたいと思っているということも赤裸々に話していかなければなりません」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)と従業員の力を挙げている。ここでは副官となる右腕と従業員全体について分けて説明されているが、この2つは他力としては1つ目である。

そして、稲盛はもう一段階上の他力として「経営をしていく上で大切な力の三つ目も、実は他力になります。ただし、これは二つ目の他力とは違い、宇宙の力を使わせてもらうという意味での他力です。または偉大なる思念の力を味方につけるといことです」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)と人間の力を超えたものを味方にする必要性を説いている。

これについては、「経営をする上で大事な三つめの力は、偉大なる宇宙の力、自然の力を得るとい

うことです。つまりは、幸運を得るといふことが必要なのです。幸運を得るためには、よきことを思い、よきことを実行する。そうすれば宇宙の力を得ることができ、運命が好転していくのです」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)とも述べており、他力というものは、単に周囲の人の力だけではなく、それを超えたものであるとの認識を示している。

だが、この第2の他力を得ることができるようになるには条件があり、このことについて稲盛は「悪い思いとは何なのかといえば、利他の対称にある利己です。自分だけよければいいというどんな欲心が悪しき心、悪しき思いです。利他の思いを常に抱き、感謝をしながら生きている人は必ず宇宙のラッキーを受けます。逆に、自分だけよければいいという利己のかたまりのような悪しき心を持っている人は、やることなすこと、なかなかうまく思うとおりに進んでいきません」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)と述べている。ここでも前章で見た「利他の心」が出てくる。稲盛においては利他の心はどのような時も最も重要な概念として登場する。他力とは任せる対象ではなく、他力を得られるかどうかは、自分の側の利他の心があるかどうかによるとしている。

つまり、稲盛は、自力の先に他力による助けがやってくるとの考え方を表明しているが、この他力にも2段階あり、より重要な高いレベルの他力について稲盛は「経営をする上で大事な三つめは、二つめと同じ他力ですが、宇宙の力を味方につけるような経営者でなければならないということです。つまり、幸運に恵まれていなければならない。その幸運はつくることができるのです。単にその人は運がよいというのではなく、その人が美しい心をしているから幸運に恵まれるわけです」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)と利他の心が第2段階の他力を得る条件だとの持論を説いている。

そして、これは他の講演や著書でも述べられていることだが、「いわずもがなだと思いますが、『利他の心で経営ができるか』ということが資本主義の社会ではよくいわれます。逆に、オレがオレがという利己でなければ経営はできないというふうに思われていますが、決してそうではありません。仏教でいう『自利利他』です。自分の利益を得たいと思うなら利他が要る。他を助けてあげることがなければ利益も得られないのです」(盛和塾「ニューヨーク」塾長例会における「一つの自力と二つの他力」)とも述べ、自利利他の必要性を説いている。自利利他については、すでに先の章で見たが、ここでも稲盛は自らの説く利他は自利利他であるということを手明瞭に述べている。

さて、ここまでのことをまとめると次のようなことが言えるだろう。まず、稲盛に関しては「自力」と「他力」を対立概念としては捉えていないということである。仏教で「他力」を説く浄土門は徹底的に「自力」を排するきらいがある(絶対他力)。そのような立場においては、徹底して人間の「はからい」が排除される。だが、実際問題、生きて働き、意思を持って人生を生きる人間に対して、これを強調し過ぎることに対して筆者はかねがね強い疑問を持っているが、これは先に確認したように信仰の問題である。さらに仏道修行は普通の人間が自ら仏(仏陀)を目指して修行するという意味であるから、自力では仏(仏陀)になれないという文脈で使われる。

稲盛も「他力」という言葉は使っているが、これは見てきたように一見して浄土門で使っている

意味での仏になるための「他力」とは違う意味で使われている。そもそも稲盛は経営の成功の話をしているのであって、仏になる方法を説いているのではないので、それで何らの問題はなのだが、稲盛は「自力」も「他力」もこの世の中での人生の成功をするためにどうすれば良いのかという文脈で使っている。しかし、「自力」については、先にも見たように日常の生活や実人生において使っても仏道修行においての場面で使っても自分で努力という共通点はある。稲盛はこの「他力」も2段階に分けているのだが、第1段階の「他力」は文字通り他人(人々)の力という意味で使っている。他の人の力という意味での「他力」である。

しかし、注意しておくべきなのは、稲盛はこの意味での「他力」も「他人の力をあてにする」、「自らの努力は放棄する」という意味では使っていないことである。稲盛の考え方において重要な点は「自力」の先に「他力」がある、「自力」で究極まで努力した上でその先に「他力」を得ることができるという部分である。稲盛は「他力」を2つに分け、第2の「他力」を「宇宙の力」としているが、ここも重要な点である。一見、これは自分の力では(意識しては)引き寄せようのないものであるから、先にみた阿弥陀如来の本願力を思い起こさせるものでもあるが、そういうわけでもない。浄土門における他力思想はあらゆる人間のはからいを捨てることを勧めており、人間のはからいを超えたところに阿弥陀如来の「他力」が働くとしている。だが、ここでいう稲盛の2つの「他力」の2段階目の「他力」を得るためにも条件があるとしている。稲盛は利他の心で生きてこそ、「他力」は得られるものであるとしている。

第3節：稲盛の自力・他力論を現代的にどう解釈するか

さて、この稲盛の「自力と二つの他力」についての見解をどう考えるべきであろうか。正確に仏教の教義—特に浄土門における教義—から考えれば、この稲盛の見解はやや違和感があるというべきかもしれない。それは、先にも見たように、浄土門における本来の「他力」の意味は、他人や他者を指しているのではなく阿弥陀如来を指しているからである。稲盛の1つ目の「他力」の力は明らかに人の力(副官や従業員)を指している。また2つ目の方の「他力」に関しても、全てを阿弥陀如来の本願力に任せるという考え方はない。稲盛は第2の「他力」(宇宙の力)を得られるかどうかは、我々の側の人間のもつ利他の心にかかっているとしている。

この2段階目の「他力」は人の力ではなく、人知の及ばない、めぐり合わせ、幸運というものを与えてくれるという意味での力を指しているが、それでもこれを得られるかどうかは、我々、人間の側の心構えによって変わっているという意味では「自力」の先にある「他力」という意味では最初の「他力」と同じである。「自力」を極力、排除するのが「他力」だという観点にこだわるならば、明らかに稲盛の見解は仏教(浄土門)の教義からは逸脱した独自過ぎる考え方ということが出来るだろう。あるいは、もう少し別の言い方をすれば、稲盛は「他力」という概念も使ってはいるが、人の力や人の力を超えた力すらも人間の側の心次第(利他の心を持つかどうか次第)で変わってくるので、徹底した自力思想の持ち主だということも可能なのかもしれない。

だが、筆者にはこう断定しきってしまうことにも違和感がある。というのは、「自力」の先の「他

力」、「自力」あつての「他力」という考え方は、絶対他力を説く浄土門における教義からは逸脱しているものであったとしても、私たち自身が一生懸命に生きていれば、しばしば、またはたまに実感することだからである。稲盛の考え方は「他力」ですらも「自力」によって引き寄せるものであるから、これは徹底して自力思想だと言い切ってしまうことも可能なかもしれない。特に1つ目の「他力」は「自力」あつての「他力」だということは誰にも理解できる。しかし、1つ目の「他力」にせよ、2つ目の「他力」にせよ、自分で引き寄せたものだとしても、「自分の力」そのものではないことも確かである。これを「他力」と呼ぶことは浄土門からみれば逸脱だとしても、実人生を生きる人間からすれば「他力」と呼んでも差し支えはないだろう。

事実、自分一人の力そのもので成し遂げられることなどは所詮、知れており、多くの人の力を集め、そして、最終的には人知を超えた力すら味方につけた人が多くのことを成していることは間違いのない事実であり、さらには、個々人の人間の人生を見ても、「自力」の果ての「他力」、「自力」の先に他力が現れるという考え方は、決して仏教的な思想に反するものではないだろう。浄土門の教義から見た時には稲盛の見解は自力思想の際たるものかもしれない。だが、浄土門（日本においては浄土宗は浄土真宗）が説いているのは、仏になるための仏道修行についてであり、この世の中を生きる普通の人間が物事を成就させるために自分以外の人々や時勢から得る力を他力と呼んだからといって糾弾されるということはないだろう。

ただ、稲盛に関しては、やはり「他力」という言葉を使ってはいるものの、先の六波羅蜜と「6つの精進」の章や利他と利己についての章でも検討したように自力思想に軸足がおかれていることは確かかもしれない。これは実業家であるから当然といえば当然であり、「6つの精進」の最初には「誰にも負けない努力」が出てきているのであるから、あえて述べる必要もないことかもしれない。ただ、重要な点は、稲盛も全てのことが自分の努力だけで成し遂げられるとまでは考えていなかったことも確かであり、むしろ、その認識を稲盛が持っていたということを確認しておくの方がより重要なことのようにも思われる。

そもそも論からいえば、本章では「自力」、「他力」という言葉を使ってはいるものの、この言葉は仏道修行をする人のための言葉である。つまりは仏陀になるための方法についての言葉である。仏道修行の究極的な目標は仏陀になりあらゆる衆生を救済することなのに対して、普通の人間は政治家や経営者といえども、そこまでのことを人生の目標としているわけではなく、そんなことはそもそも不可能なことである。それこそ仏教的な言葉を使うなら、一隅を照らす（世の中の一部分を良くする）のが普通の人間の限界である。

また、浄土教については、何よりも浄土三部経（『仏説阿弥陀経』、『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』）が信仰の対象となっているので、阿弥陀如来の存在を信じることが大前提となる。だが、通常、一般の我々（浄土教系統の宗派の信者ではない者といっても良い）は阿弥陀如来の働きが本当にあるのかわからないのかは、この人生において（今世においては）は明確には証明のしようがない。これは信仰の問題であって、科学的に証明のできるものではない。また同じ仏教の信仰者であっても浄土教系の宗派ではない宗派の信仰者はまたことになった信心を持っているであろう。

だが、一方、必ずしも浄土教(浄土宗、浄土真宗)の信仰をもたない人間であっても、周囲の力のありがたさ、思いもよらないところから助けを得ることのありがたさ、自力による努力の先に、自分の力を超えた大きな力が働いて道が開けるという経験をしたことのある人は多くいるだろう。筆者自身もささやかながら、自力(自分の努力)の先の他力(人々の力、想像もしていなかった巡りあわせの力)に助けられたという経験はこれまで何度もしてきている。今の自分があるのは、ほとんどが自力(小さな自分の力)の先の他力(大きな力)のおかげだと筆者自身はいつも感じている。自力段階では到底、想像もしていないことが現実になって、それこそ不可思議な力が働き、そのことで道が開けたという経験を持つ人は多いだろう。

その視点から限られた人生の期間に何を成し遂げるかという観点から考えた時に「一つの自力と二つの他力」という稲盛の考え方は多くの人々にとって分かりやすく、また実践すべき教えだということができるだろう。しかし、この考え方は実際の我々の実人生において実践可能だといっても、稲盛のいう「二つの他力」の中の1つ目までは理解できても、2つ目の部分までは理解が及ばない人も多いであろう。したがって、まずは自分が自分以外の人々の力を借りられるだけの器の人間になるには、自分はどうあれば良いのかと考えて日々、努力するだけでまずは十分なかもしれない。

おわりに

以上、本稿においては稲盛における仏教思想の影響について考察してきた。第1章においては、稲盛と仏教との幼少期における最初の出会いを確認した。稲盛は小学校の入学前に鹿児島で最初の宗教体験をしているが、この体験が後々まで大きな影響を与えたことを確認した。この時の宗教体験は宗派的なものではなく、大いなるものへの畏敬の念と感謝の念を持つという意味で稲盛に一生涯、影響を与えたものであった。

第2章では『生き方』に見られる稲盛の宗教観を確認した。稲盛の経営哲学の根底には仏教思想が流れているが、これは幼少期から一貫して稲盛の人生の中で流れていたものであった。仏教思想とは別に稲盛は潜在意識の重要性を非常に強く説く部分があるが、倫理的な部分、物事の判断基準の部分に仏教思想があり、そして物事を実現させるための原動力として潜在意識の力を使って来たと考えて良いであろう。潜在意識論に影響を与えたのは別の論稿で述べた通り谷口雅春と中村天風だが、この二人からの影響は仏教からの影響とはやはり別者だと考えるべきであろう。

続く第3章では稲盛の説く「6つの精進」と仏教における六波羅蜜の関連について考察した。その結果、共通点はあるものの、全面的に一致しているというわけでもないことが確認できた。これは、そもそも、六波羅蜜の中の一つである精進が稲盛においてはさらに6つの徳目に分けられているので、当然といえば当然かもしれない。しかし、部分的には重なっている部分もあった。六波羅蜜については、精進波羅蜜の部分だけではなく、布施波羅蜜の部分については、稲盛は善行・利他行というものを「6つの精進」の中に入れていたので、いささかの関連性もみられた。

第4章では、稲盛の説く「利他」の概念について考察した。利己と利他については、様々な議論があり、利己と利他は必ずしも対立概念というわけでもない。利他でないものが必ずしも利己では

ないとの同様、利己でないものが必ずしも利他でないこともある。さらには利他といった時に、相手の感じ方、捉え方によっては、ある人がある人に対して利他的と考えた行動が実は利己的になっている場合もあるという問題もある。しかし、本稿で確認したように、稲盛は利己と利他をほぼ単純に対立的な概念としてとらえていた。人間には利己的側面と利他的側面があり、利己的側面を極力、抑えて利他的側面を出すべきであるという稲盛の主張は一貫しており、その際には利他の概念については、稲盛がそこまで厳密に深く詰めていたとはいえない。

また、稲盛においては、利他は常にまずは相対している相手、商売上の取引相手というものを想定していること、また自他を分けた上で利益をどう考えるかという視点から考えられていることを確認した。その上で、利他には忘己利他と自利利他があるが、稲盛は自ら自利利他を説いている。これは、極めて平たくいえば、人間は自分のことだけではなく、他人（相手）は周囲のことも配慮すべきであり、そのようにすれば、それは自分にも返ってくるという考え方を説いているということであり、それ以上に利他の概念については、そこまで深い考察の対象とははなされていないといっても良いと分かった。

しかし、このことは大きな問題ではない。そのような問題については、また専門的な学者が多くのパターンから利他概念の分類を考察すれば良いことである。それ以上に本稿では稲盛がいかに利己的な人間、傲慢な人間、反省をしない人間を嫌い、自分はそうはならないように長年にわたり努力を続けてきたかということが改めて確認できた。稲盛が利他の重要性を説く時にはほとんどの場合、何が利他かということまでは問題にされず、大善と小善の問題が追加的に言及されているだけである。

それ以上に利他の重要性について説かれる場合には、利己的な人間への批判の表現とセットになっていることが多い。こちらの方が稲盛という人間を理解する上では重要なことだと思われる。これは稲盛の正義感から出てきたものというよりは、事業を始めた初期の段階で利己的な人間に何度も実際に会ったからこそ出てきた考え方なのかもしれない。また、そのような利己的な人間の没落も稲盛は自身の目で見えてきたのかもしれない。稲盛においては利己と利他の問題は、哲学者の行う観念的な議論の対象というよりは、社会に現実から次から次といくらでも出て来る利己的な人間との対決の中で考えられてきた問題だったと考えるべき問題のように思われる。

そして、最後の第5章では、自力と他力の問題を稲盛はどのように理解していたのかについて考察した。ここには稲盛ならではのオリジナリティがあり、その特徴は稲盛においては、自力の先の他力、自力と他力是对立する概念ではなく、自力の先の他力、自力の果ての他力という考え方に稲盛の特徴があることを確認した。

以上、稲盛の著作を中心に稲盛における仏教思想の影響について考察したが、本当には突き止めることができない部分も多い。分からないことは、稲盛は65歳で在家得度をして以来、臨濟宗の僧侶（禅僧）でもあったわけであるが、稲盛が座禅体験からどのような悟りを得たかである。『生き方』の中に得度したからの心境の変化については少し言及されていたものの、座禅の体験から得た悟りについては、ほぼ稲盛の書籍には記されていない。

稲盛は在家得度によって臨済宗の僧侶となったのだが、稲盛の著作の中にはほとんど臨済禅についての記述はない。臨済宗であれば最も重要なテキストは『碧巖録』や『臨済録』である。だが、稲盛の著作に『碧巖録』や『臨済録』への言及を見つかることもできない。また、臨済宗では人間の悟りの段階を示した『十牛図』も重視される。だが、稲盛の著作の中には利他や六波羅蜜についての言及、また自力、他力という言葉は出てくるものの、ほぼ禅語というものは出てこない。

日本の禅宗には臨済宗と曹洞宗があるが、曹洞宗が座禅を組み座ること自体に集中する黙禅の立場(只管打座)を採るのに対して、臨済宗は公案(禅宗における問答、問題)の解決により悟りに近づこうとする看話禅(公案禅)の立場を採るといわれている。しかし、稲盛の著作には公案について出てくるものは一つもない。

したがって、稲盛が臨済宗(禅宗)から受けた影響については、稲盛の記した著作による研究からは、ほとんどは分からないとしか言いようがない。そもそも禅宗には個人の悟りの内容を言葉にすることへの困難性から言葉を嫌う「不立文字」という考えがあるので、稲盛も自身の内面(悟りの経験、境地)をあまり言語化して自身の著作には記さなかったのかもしれないとも考えられる。とはいえ、「不立文字」はどちらかといえば曹洞宗の禅であり、稲盛の得度した臨済宗は問答への取り組みと問答への解決を通じて悟りへと近づく側の宗派である。その意味からはもう少し稲盛の著作の中に公案禅についての言及や禅的な言葉が出てきても不思議ではない。

精神的指導者であった西片擔雪老師について若い頃から長期にわたって参禅した稲盛は、本当はかなり臨済宗の修行の中で公案にも取り組んだのかもしれない。そして、自分なりの回答を見出し、公案禅のアプローチでの修行も進めていたのかもしれない。だが、公案禅については稲盛の数多い著作には全く出てこない。公案禅についての記述が稲盛の著作に出てこないこと理由は本当のところは分からない。公案に取り組みながらも、あえて著作では語られなかったのかも知れないし、また稲盛は公案には取り組まず精神を集中させるための座禅(むしろ曹洞宗的な只管打座)に時間を割いたのかもしれない。

もしも、仮に臨済宗からの影響が意外に少ないのであれば、むしろ、稲盛における仏教の影響は臨済宗よりも、自力や他力という言葉に象徴されるように浄土門の影響の方が勝っていたのかもしれないようにも思われる。だが、これとても、稲盛が最終的に宗教的な意味での絶対他力の信心を説いているわけではないので、そのように言い切ることもできないであろう。本稿ではあくまでも著作の中で言及されている範囲の中で稲盛における仏教思想の影響について考察した。

【参考文献】

- アルボムツレ・スマナサーラ『日本人が知らないブツダの話』学研、2010年
 稲盛和夫『生き方：人間として一番大切なこと』サンマーク出版、2004年
 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』日経ビジネス人文庫、2004年
 稲盛和夫『人生の王道：西郷南洲の教えに学ぶ』日経BP社、2007年
 稲盛和夫『働き方：「なぜ働くのか」「いかに働くのか』三笠書房、2009年

稲盛和夫『京セラフィロソフィ』サンマーク出版、2014年

稲盛和夫『心。：人生を意のままにする力』サンマーク出版、2019年

梶山雄一、瓜生津隆真編『大乘仏典〈14〉龍樹論集』中公文庫、2004年

玄侑宗久『お坊さんだって悩んでる』文春新書、2006年

日置弘一郎・奥野明子・寺本佳苗・中野悠利子・李超・栗野智子『利他の構造』、ミネルヴァ書房、2021年

中村元、田村芳朗、末木文美士、福永光司、今野達編『岩波仏教事典第二版』岩波書店、2002年

稲盛和夫「一つの自力と二つの他力」、盛和塾ニューヨークの塾長例会における講演、2006年